

高台移転の阻害要因や原地復帰の契機を指摘し、「なぜ戻ってきてしまうのか」と警鐘を鳴らす本書の意義は、人はどこでどのように生き、どのように命を守るべきなのかという問いについて、生活者の視点から問い続けたところにある。居住空間と社会や文化の関わりに関心を寄せる地理学においても、今改めて山口の問題意識を真摯に受け止めたい。

(B5判 二五七頁 二〇一二年六月)

三弥井書店 税別一八〇〇円)

(相澤亮太郎 甲南女子大学人間科学部講師)

会 告

二〇一二年度史学研究会大会および総会は、予定どおり十一月二日(金)午後一時より京都大学文学部第三講義室にて開催されました。

公開講演は、夫馬進、春田晴郎の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終わりました。

東アジア交流史上における

朝鮮洪大容の北京旅行とその後

夫馬 進氏

パルティア史研究から分かること

春田 晴郎氏

なお、大会と総会に先立って開催された定例の理事会・評議員会において、二〇一二年度会務報告がなされました。

二〇一二年度

史学研究会大会講演要旨

東アジア交流史上における

朝鮮洪大容の北京旅行とその後

夫馬 進

洪大容(一七三一年から一七八三年)は、韓国では実学思想家として誰もが知っているほど有名である。ところが日本ではおそらく、洪大容という名前も彼の北京旅行記である『乾浄筆譚』も、ほとんど知られていないであろう。しかし『乾浄筆譚』に描かれる三人の中国知識人との交流は、おそらく東アジア交流史という大枠で見ても空前絶後なまでに親密なものであったと言つてよいし、彼の思想もまた、実学思想という韓国独自の枠組みでは捉えきれないほど興味深いものである。日本でも彼の旅行記と思想とは、もっと知られてしかるべきである。また、彼の思想を従来のような実学思想という枠組みに押し込めてはならない。

洪大容という人物とその思想を理解する

ためには、彼の生涯を二つに大きく分ける必要がある。それは彼の北京旅行である。

彼は一七六五年（乾隆三十年、英祖四十一年）から一七六六年にかけての五ヶ月間中国を訪れ、一七六六年の二月に三人の中国人と交流した。これが彼の人生および思想を変化させる大きな契機となった。たとえば「情」の問題がそれである。はじめ、中国人が泣くを見て「女みたいだ。士大夫の交わりは義の交わりであるべきだ」と言っていた洪大容自身、帰国間際になると、中国人からもらった手紙を読みながら涙を止めようがなく、カーテンを下ろして泣いてしまったのである。このような「情」のあり方が、その後の朝鮮に大きな影響を与えた。

洪大容研究の最も大きな問題は、彼が北京で見せた思想および交遊の問題であるとともに、帰国後における彼の思想と交遊の変化であり、その変化をどのように遂げていったのである。思想変化の中でも重要なのは、『医山問答』がどのような過程を経て誕生したか、それは東アジアの思想史の中でどのような位置を占めるかという問題である。『医山問答』はこれまででも、

洪大容の思想を研究する上で重要な文献として位置づけられてきた。ただ現在の段階というなら、そこに見られる彼の宇宙論や地球論は必ずしも重大な問題とならないと考える。もっとも重要な問題は、そこに東アジア思想史上で比類を見ないほど徹底した事物と価値の相対化がなされていることである。

洪大容は帰国してしばらくの間、北京で中国の知識人と語った時とはば変化のない堅い朱子学者であった。ところが中国の友人である嚴誠が一七六七年（乾隆三十二年）の秋に書いた手紙を、その翌年に受け取ったあたりから変化してくる。このほば三千言におよぶ手紙は、洪大容に対する嚴誠の「遺言状」であった。そこでは洪大容の思想に対して厳しい批判がなされている。すなわち朱子学一辺倒であるからもう少し先入観を取り払うべきこと、鄭玄ら漢儒の功績も偉大であること、仏教・老莊にも寛容たるべきこと、陽明学批判はすでに中国では主要な課題ではなくなっていること、などが述べられている。洪大容はこの手紙を受け取って以後およそ一七七五年頃まで、長い思想混迷期に入ると考えられる。

当時中国の友人に与えた手紙には、彼がしよつちゅう病氣していることを訴えており、よく眠れないこと、髪が真っ白になり歯が抜け落ちてしまったこと、病氣でいつもいらいらして周りに当たり散らしていたことが記されている。そこからはまったく「居敬」に務めたかつての朱子学者の面影を見いだしえなくなっている。

一七七三年から一七七六年の頃にかけて、『医山問答』の思想が形成され定着したと考えられる。一七七九年（乾隆四十四年）に中国人に与えた手紙では、道学者的なリリズムは一切なくなっており、中国の友を思う至情が見えるだけのものとなっている。たとえば、「その（わたしが中国の友を思う）悲恋の情はと言えば、ちょうど女子供の私情のようなものであつて、それさえ私ほどではありません」（四十九歳、『湛軒書』外集卷一、答朱朗齋文藻書）などといった言葉が見える。彼はその十四年前に、洪大容自身が非難した中国人のようになっている。

洪大容の思想変化の過程をたどる上で重要な史料となるのは、彼が外国人である中国人に与えた手紙である。そこには国内の

友人には言えない言葉が多く書き連ねてある。

彼がみせた徹底した相対化、これによる体制批判は、同時代の中国や日本にもない程のものではなかったか。厳誠の「遺言状」をベースにして、はるかにこれを超えていったのではないか。しかも彼は、中国人が多く落ち入った考証学（漢学）の隘路へも入り込まなかった。それはまさしく「出藍の誉れ」といってよいであろう。これを可能にしたのは中国人との交流に加えて、中国人が不得意とした天文学についての造詣に深かったためであろうと考える。

パルティア史研究から分かること

春 田 晴 郎

アルシャク朝（アルサケス朝）パルティアは、紀元前二四七年頃から後二二四年にかけて存在した国家である。最初の百年ほどはイラン高原東北部・トルクメニスタン南部の小勢力に過ぎなかったが、前四一年以降メソポタミアに進出し、イラン高原からメソポタミアを支配する大国となった。

パルティアに関する史料は非常に少ない。こうした史料状況からは、「反証可能性の異」とでも言うべき現象も見られる。さまざまな「起源」をパルティア時代にもつていく根拠の弱そうな説が出されても、明確な反証ができないゆえ、そのまま通用してしまうことが存在する。

パルティアは、一般的な印象とは反対に過大評価されている。ローマと対等あるいはライバルなどと言われることも多いが、ローマ側の言う「脅威」は、イラク戦争直前にアメリカが言っていた「イラクの脅威」と比較することができるだろう。

パルティアや周辺諸国の美術は、文化相對主義についても再考する材料を与えてくれる。写實的でないからレベルが低いなどとはもちろん言えないが、スーサ出土アルタバーン四世浮彫では稜線がずれてしまっており、拙いという評価は不当ではないだろう。このような例は王朝後期には他にも多数例があり、ポストモダン要素を考慮すべきかもしれない。

イラン学との関係はパルティア研究の基本をなすが、嘗てはあまりにイラン中心主義の傾向が強かった。

このような研究上の歪みを抱えるパルティアについて、具体的にどのようなアプローチで研究を進めているのか、述べてみる。

基本的な視点は、『岩波講座 世界歴史 2 オリエンタル世界』内で記したように、前一千年紀前半から後一千年紀中頃までの巨視的な変化——いわゆる古代文明の終焉・世界宗教の広がり——を押さえ、その中でパルティア時代の変化、さらにその変化への寄与がどこからなされたか等を考察することである。

パルティアの建国は、北方、中央ユーラシアの遊牧民の進出の結果おこった。ここが本拠地であるパルティア本土を通時的に眺めると、パルティア以外にも、フラグ以前のモンゴルやナーデル・シャーが根拠としたことに気付く。騎馬遊牧民国家としての共通性があり、とくにモンゴルとは、後にアゼルバイジャン方面に進出するという点も共通している。

創設者アルシャク一世貨幣の一部にはアラム文字の銘文が見られるが、次にアラム文字銘文が貨幣に用いられるのは二五〇年以上後であり謎であった。しかし、最近意

外などところからヒントが得られた。M I H O MUSEUM蔵「鶏を銜える山猫のリュトン」のアラム文字銘文が、カルシヤという単位を用いて記されていることが判明したが、単位カルシヤを用いる銀器の出土例はウラルやシベリアなど北方のみであり、字体もバルティアのニサ陶片文書（前一世紀）よりは古いことから、アルシヤク一世の属した集団も、これらの文化背景を持っていた可能性がある。

ローマとは比べべくもないが、それでもバルティアは周辺にとつては大国であり、周縁の小国から得られる情報も貴重である。東京国立博物館蔵「こぶ牛の銀皿」に刻された中期ベルシア語銘文は、紀元前一世紀ベルシス（ベルシア本土）の小王朝のものとでの書記法が部分的にはバルティア語書記法より先んじている面もあることを示す。エリユマイス王国タンゲ・ボターン（偶像の峽）の浮彫は、このような辺境でもヘラクレス像が彫られるなどギリシア文化の浸透の深さを示している。

エデッサを中心として小王朝オスロエネは、古シリア語・古シリア文字文化がバルティア時代に生まれた地である。古代オリ

エント博物館隊が発掘したテル・ミシヨルフエの石製品に記された古シリア語銘文は、種類としても稀で、しかも発掘品として価値が高い。

まとめにかえて、以下のことを指摘しておく。バルティアは、ユーラシア西端の国（ローマ）とも東端の国（漢）とも国家間交渉を持った最初の国であり、またいわゆる古代メソポタミア文明が姿を消した時代に栄えた。このような国・時代であるから、時間的にも空間的にも多様な視点が必要である。とくに、前二世紀頃以降のさまざまな集団が自立し、文字も各地で分化していたが、ローマ側と比較してバルティア側では、多様性が比較的保たれた。現在にいたるまでの西イラン・シリアにかけての状況を生んだ要因の一つとなつたのではない

二〇一二年度

史学研究会大会・総会の記録

史学研究会の二〇一二年度大会・総会は、一月二日（金）一三時から一七時半まで、京都大学文学部第三講義室において開催された。

総会では、上原真人理事長による挨拶の後、根津由喜夫氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告・審議がなされた。

庶務（井谷銅造常務理事）からは、役員交代、その他について報告があり、来年度の例会は四月二〇日（土曜日）に「移動」をテーマとして開催することが案内された。

編集（小山哲常務理事）からは、『史林』の刊行について報告があった。

会計（米家泰作常務理事）からは、二〇一二年度予算の紹介、その他の報告があった。

広報（高嶋航常務理事）からは、広報関係について報告があった。

これに引き続き、公開講演が行われた。講演は次の二本であった。

夫馬 進氏

「東アジア交流史上における朝鮮洪大容の北京旅行とその後」

春田 晴郎氏

「バルティア史研究から分かること」

講演者紹介と司会は、それぞれ高嶋航常務理事と井谷銅造常務理事がつとめた。講